

ぶかぶかグラス

カタンカタン、カタンカタン

窓から見える景色が、灰色から緑に変わってく。

カタタンタン、カタタンタン

そのうち周りが緑ばかりになって、ゆっくり流れていく。景色にも、リズムってあるもんだな

「はい、ぼつぶちゃん。おみかんよ」

「あ、冷凍みかんだ。ありがとう、はづきおねえちゃん♡」

あゝあ、リズムくるうちまった。そりゃ、無視するわけにいかないけどさ。

窓から顔を離したら、そこには二つの顔がにこにこしてる。

「まさるくんも、おみかん食べない？」

まあ、こっちはいいんだ。むかしからだし。けど

「冷凍みかん、おいしいよ。まさるおにいちゃん」

春風の妹に、おにいちゃんなんて呼ばれる覚えはねえっ！——つても、それ言つとあいつ泣くしなあ

しかたねえからもらった冷凍みかん、トランベツトの上でお手玉してみる。窓の方向いても、ふたりしてじつと見てんのわかるよ。

はあ。まったく、なんだってこんなことになっちゃまったんだろっ？

最初は、もと美空小の連中でペンションに行くって話だったんだよな。同窓会みたいにして。

そしたら春風たちが、知り合いのおばあちゃんがやってるところがあるから、そこに行こう、ってことになったんだ。

ペンションの手伝いすれば、ただで泊まれるっていうからおれも賛成したのに、みんな塾の模試だと

3 ぷかぷかグラス

か田舎のじいちゃんに会いに行くとかで 気がついたら、行くのは俺たちだけになってた。

けど、なーんかあいつらにハメられたような気がすんだよな。特に春風とか、小竹とか。

そりゃたしかに藤原とは、最近あんま話してないんだけどさ。それには、それなりの理由があるんだ、ってえのに。聞きやしねえ。

小竹には蹴り一つ入れたってのに、怒るところか笑って『お楽しみ〜』だもんな。ったく、なに考えてんだかなあ

でも、いまさら中止にやできねえよな。手伝わって言うちまったから。

窓の外をぼーっと見ていると、海の匂いがしてきた。思わず、ペットのシリンドーを確かめちゃう。いや、匂いくらいじゃ錆びないんだけどな。

「ねえ、はづきおねえちゃん。まだかかるの?」
「そつねえ。前に行ったときはバスだったから、ちょっとわからないけど」

背中であたボケたやりとりしてるな。

「中伊豆だろ? まだ小田原にもついてないぞ」

目だけそつち向いて言ったら、あいつはべるっ、と舌を出して照れ笑い。急いでまた窓の外に目を向けたけど、まだ目の奥に顔が残っちまってる。——ちつ。

だいたい、いまさら舌出してごまかせる立場かよ。観光ガイドにも電話帳にも載ってないペンションに、『バスで行ったことがある』ってだけで行こうとするんだもんなあ。そのくせ地図出しても場所がわからなくて 結局、春風から簡単な地図もらってなんとかあったんだ。

そのかわり、よけいなオマケも付いてきちゃったけど。

「よけいなオマケ、か」
見たいわけじゃないのに、勝手に顔が窓から離れ

てく。ああああ、格好だけはよそ行きの服だったのに、ちびっこい体でぎゃあぎゃああって、スカートめくりあげちまって。姉ちゃんそっくりだな。

でも、こいつがいてよかった。もしいなかったら

「え？」

ちよっと前が暗くなったと思ったら、目と鼻の先に大きなメガネ。って、おい。な、な、なんだあっ!!?

「うわあっ!! べ、べつに、よけいってのはそういう意味じゃねえぞ、その、単に」

な、なに言ってるんだ、おれ!?! これじゃ、まるで

「ふふ。ヘンなまさるくん」

そう言ってる、藤原がまた元の場所に戻ってた。長めの白いスカートがふわっと動くと、花の匂いがやってくる。

ああ、びつくりした。心臓がはじけるかと思った

まだ、治まんねえよ。ちえっ。

それにしても　よく考えりゃ藤原のかあさんも

ヘンなんだよな。おれと旅行に行くって言ったら、喜んでたっつんだから。

中学生の娘が保護者もなしに泊まりで旅行なんて、普通反対しねえか? どっちかって言うとおれのかあさんの方が心配してるなんて、逆だよなあ。

気がついたら、またおれの目にあいつらが映ってた。くだらねえ話をえんえんやってる二人　おれなんか、いてもいなくても関係ねえみたいな二人。

ひよつとすると、おれにそんな、心配するようなことできるわけない、って思われてんのかもな。

そう思うと、ちよつとだけ、まわりが暗くなるよ　うな、そんな気がした。気のせいなのは、わかってるんだけど。

ふわ。なんか、眠くなってきちゃった。ここんとこ、まともに寝てねえからなあ

っていつより、寝たくねえんだよな。でも

目が閉じてくな

ああ、

「るくん、まさるくん？」

藤原の声で、おれはぼつ、と目を開けた。

目の前にはメガネの顔。思わず胸をおさえて息をついた。ああ、よかった。いつものあの夢じゃなくて。

ぼんやりした頭が、少しずつはつきりしていく。空気の匂いがちがつ、ってことは、もう乗換駅ついた。ん!?

「よかった、まさるくん。起きないかと思ったわまさるくん、どうかしたの？」

おれは一瞬、言葉が出なかつた。さっきまで、ようやく海が見える、ってとこだったはずなのに、あたりは山。目の前にペンション。後ろには 電車も駅もありやしない。

ど、どうなって!?

「まあまあ、ようやく起きたのね」

藤原の後ろから出てきたのは、おばあさんだった。ちよつと涼しくなつたくらいなのに、肩掛けはあつて、大きな帽子のせた人。

顔じゅう笑い顔みたいなの、話し好きそうな人だ。

「下の駅に迎えにいったら、よく寝てましたからね。起こすのもかわいそうなので、ここまで乗せてきたんですよ」

あ、ああ。そういうことか。乗換駅から、そのままで来た、ってことだな。

おれはすぐ、頭下げた。こいつらと3人分も、もう迷惑かけちまつたのか。

「いいのよ。私も、久しぶりに乗りましたからね。いい練習ができましたよ」

って、こんな山奥でペーパードライバーかよ。危ねえおばあちゃんだなあ。

「まさるくん、この方が、ペンションのオーナーの、リリカおばあちゃんよ」

リリカ？ リリカって、どっかで ああ！この

人が、巻機山のおばあちゃんかあ。

おれはまた、ぺこつと頭を下げた。わるいひとじゃない、つてのは、見ただけでもわかる。

「それじゃあすみませんけど、今回もよろしくね」

だから、手伝いなんて簡単だろう、と思つてんだ。このときは。

「まあまあ、お疲れさまでした」

壁によっかかつて休んでると、頭の上からのんびりした声が響いてきた。リリカおばあちゃんが、おれの前に麦茶入りのコップを置いてくれる。

けど、おれはもう返事する気にもなんねえや。

「やっぱり男の子ねえ。全部ひとりでできるなんて言われて、おれはまわり見回した。首動かさなきゃ全部見えないくらいなの、大きなジャングル風呂。」

風呂の掃除がこんなに疲れるなんてなあ　ここ

についたのは昼間だつてえのに、もう夕日も見えなくなつちまった。

春風たち、これ知つてて逃げたんじゃねえだろうな？

「でも、はづきちゃんも一緒でよかつたのだけど、ねえ。部屋の方の掃除は、そんなに大変じゃないから」

ああ、たしかにひとりやる、つて言つたのはおれだよ　けどそりゃ、藤原が悪いんだ。いっくら風呂掃除でぬれるからつて、おれの目の前で、いきなりスカートたくし上げたりするから　つて、うわあっ!?

目の前がリリカおばあちゃんの顔でいっぱいになつて、おれは思わず壁に貼りついちまった。

「え、な、なん　ですか？」

おばあちゃんはおれの目を覗き込んでから、すうつと離れて、

「ふふふ、べつに。それじゃ、お湯入れますからね　ゆっくりつかつてくださいね」

7 ぷかぷかグラス

そのまま、湯船の蛇口を開けて出て行った。
おれはその後ろを、真っ赤になりながら見送った。
なんとなく、見られたような気がしたんだ。おれ
の、心のなか。

脱衣所で服脱いで戻ってくると、湯船には少しだけお湯がたまっていた。

硫黄かなんかのおいがある。一応、ちゃんとした温泉なんだな 熱いお湯が、蛇口からどどどと落ちてくるのを眺めながら、おれはそんなことをぼーっと考えてた。

今日は9月の18日。連休だったのにお客が誰もいないから、変なものでも出てくるんじゃないかと思っただけで、そうじゃないんだな。

こつこつした岩の湯船に、お湯がゆっくり広がっていく。外はもう暗くて、脱衣所の明かりと月明かり

が水面に反射してる。きらきら、きらきら
「よーし、いっちばーん っ、あれ、まさる
おにいちゃん？」

あつちやあ。来ちまったよ。春風の妹。
「悪いな。先に入ってるよ」

脱衣所の方を見ないで手だけ振ったけど、声がそのまま近づいてきた。

「べつにいいって。あたしまだ子供だし。はつき
ちゃんの彼女なら、見られてもへいきだもん。」

ちゃんとした彼女もちが、小学生に手なんか出さないでしょ？」

おれは思わず、頭かかえちまった。
なんていうか 小5の頃の春風って、こんなの
だったっけ？

まあ、こいつが気にしないならいいか。言ってる
通り、おれのほうは別に意識なんてしないしな。

「よいつ、しょ あいてて」
飛び込むなよ、ってもう遅いか。

「いま入れはじめたばかりだから、からだ洗って待つてろよ。耳の後ろまで、ちゃんと洗うんだぞ」

湯船に入って岩に腰かけて、もうすぐ膝ぐらまでくるお湯を感じていたら、肩にぼん、と手の感触があった。

「やさしいんだ、まさるおにいちゃん。さっすが、はづきちゃんの彼氏だよねー♡」

やさしい、か

「え？　なんか言った？」

おれは春風の妹に背中向けて、そのまま、たまつていくお湯を見つめて、

「べつに」

ちょっとだけ顔を上げてから、首を振った。

だったら、あんな夢見るわけないんだ。そう、もしやさしかったら

お湯がたまつたのを見計らって、おれは蛇口を閉めた。

とたんに、あたりがしん、とする。

脱衣所の灯りと、月や星の明かり。それで湯船がすこし光って見える。おれはその中につかって、窓の外の星をぼーっと眺めていた。

頭の中に、風景なんて映ってない。さっきから、同じことをぐるぐる考えてんだ。

藤原は、なにしにここへきたんだろう？

最初は、同窓会だった。そこまではいいんだ。おれも、だから来たんだし。

けど　いっくら約束したからって、おれとふたりになってからも来ようとするってのが、よくわかんねえ。ずっと楽しそうで、意地になつてるようにも見えねえし。

9 ぷかぷかグラス

おれといるのが楽しい、なんてうぬぼれちゃいない。

あいつはここんと、学校から帰るとすぐにMAH H O堂寄ってるんだ。もう空き家のはずのMAH O堂、そこで、誰かと会ってる。ほとんど毎日、つて、それ見てるおれも自分で嫌になるけどな。

でも、相手はおれじゃないんだもん

カチャカチャン

ん？

ああ、春風の妹か。そういえば、こいつも謎だよな。なんのために来たのか 姉ちゃんはいないし、藤原はともかく、おれもいつしよに来てるつてのに。

「なあ」

「ぼつぷー！」

え？

呼びかけようとしたら、なんだか怒ったような声にさえぎられた。なんだ？

「人の名前は、ちゃんと呼びましょう、って、教

わったでしょ？」

むすっとした顔で、こつちにらんでるよ。おれも5年のころは、こんな風に見えたのかな

「悪い。じゃ、ぼつぷ。ぼつぷは、なんでここに来たんだ？」

「それはねえ じゃーん！」

なんだ？

両手になにか持って、こつちに伸ばしてきたぞ。手の中にあるのは、透明ななにか

「グラスだよ、グラス」

ああ、言われてみりゃ、たしかにグラスだ。ブランドーグラスだっけ？ わりと大きなヤツ。カチャカチャいってたのはこいつだったのか。

けど、グラス持ってなにやってんだ？ 夜に風呂場でなんて。

「グラスはねえ、浮かぶんだよ」

いきなり言われて、おれはちょっとだけびっくりした。

「あ、ん？」

とつさに、言葉にならなかった。なに言ってるんだこいつ？

「あたしは、ガラスが好きなの。けど、お風呂のおもちゃなんて、みくんなプラスチックなんだもん。手ざわりわるくってさ」

言いながら、ガラスの中にピンク色の水を注いで、それをお湯の方に持っていつてる。

「だから、ときどきガラス持ってきて、お風呂で浮かべてるの。ほら、浮かんだ」

見上げたこいつの顔、浮かんでるピンクのガラスに映って、薄暗い中なのに輝いて見えた。

思わず、少し下がっちゃうくらいに。

「家でやると、あとで怒られちゃうんだけどさ。こごでなら、思いつきりできるもんね。」

さあ、あと10個、浮かかべるぞあ

「そっか」

こいつはこいつで、楽しみがあって、やりたいこ

とがあって来たんだな

「まさるおにいちゃん？」

2つめのガラスが、風呂に浮かんでる。今度はみどりのガラスか

「あ？なんだ？」

3つめのガラスに色つきの水を入れてるのを、おれはぼーっと眺めてた。

「はづきちゃんも、きつと同じだと思っよ」

なっ!?

「はづきちゃんもさ、きつと、こごでしかできないこと、しに来たんじゃないかな？」

3つめのガラスが、ゆらゆらこつちに流れてきて

おれはばっ、と目をそらした。

なんでだ？ そのガラスの中に、あいつの顔が映って見えるなんてよ

目の前に、藤原がいた。

なんだかふわふわした感じの世界だな あ、し

まった。おれ、寝ちまったのか？

(まさるくん ?)

だめだ、目を覚まさないよ。このままじゃ

(まさるくん?!?)

やめろ、矢田まさる！こんなのは嫌だっ!!

(まさるくんっ!!)

「はづきいいっ!!!」

思いつき開いた目に、薄暗い湯船が映った。

息が上がって、のどがカラカラだ けど、なん

とか、ギリギリで、起きられたな。

あとちよつと遅かったら 寒気がする。嫌だ、考

えたくないっ！

「どうしたの、まさるくん!？」

ん？そついやさつきから、背中に、なんか当

たって うわあっ！

「な、なん、はづき!？」

がばつ、とお湯から立ち上がるうとしたおれの両

肩が、しつかり押さえられてた。

背中には、まだタオルの感触がある。

「ねえ、わたしがいいたい ?」

「べ、べつにっ!」

また立ち上がるうとしたところで、首になにかひっ

かかった。

「ぐえっ!？」

足が滑って 気がついたらそのまま、湯船に仰

向けに浮いていた。

真上に、あいつの顔がある。くもったメガネをお

湯でぬらして、またかけて、じつとおれを見ながら、

「まさるくん、ここのとこるずつと避けてるでしょ、

わたしを」

思わず、つばを飲んじまった。タオル巻いたはず

きのからだだが、ほんの数cmのところにある　ダメだっ！

「ほら、またむこう向いちゃうし。　なんでなのかな、って、ずっと考えてた。もしかしたら、美空中に好きな子ができたのかな、とか。

でも、どれみちゃんに聞いても、そんなことない、って言うのよ」

首を両手でしっかりと押さえられて、じつと目を見つめられてる。これじゃ、もつ目をそらすこともできねえ。

「ねえ、わたしを避けてたのって、いま見てた夢と関係、ある？」

くっ　！

そっだよ。こいつは昔っからカンのいいやつなんだ。それも、なぜかおれにだけ。

でも、言うわけにいかない。これだけは

「ふ、藤原こそ、いつもMAHO堂で誰かと会って

るじゃないか。そいつでいいだろ？

おれはそんなに特別じゃないっ！　なんでそう、いつも会ってなきやいけないんだよ!!」

ほとんど息しないで、一気に吐き捨てた。ああ、ストーカーまがいのおれだ。嫌いになれよ。どこでも行っちゃまえ。

そうなっても、知られるよりましだ、っ！

「ふう」

おれは目をつむって、待ってたんだ。怒鳴るか、殴るか、泣いて出て行くか。

でも、はづきはため息ついて、それから少し、首を抱えてる手に力が入った。

「温泉に、家族じゃない男の子といっしょに行って、同じお風呂入ってるのよ？　わたしが、どれだけでもどきしてるか、わかる？」

目を開けたおれの前には、微笑んでるはづきがいる。

「たしかめて、みる　？」

首を押さえてた手が、そっと外れた。それと同時に

に、おれの右手がゆっくり上がって、タオル越しに、はづきの っ!!

「や、やめてくれえっ!!」

はづきの手を跳ね飛ばして、おれは立ち上がった。あいつに背を向けて。

「おれはイヤなんだ。 はづきが泣くの、いやなんだよ!」

背中、じつとこっち見てるのがわかる。ああ、もうダメだ、止まらねえよ!

「ああ、そつだよ。はづきが夢に出てくるんだ。毎晩、毎晩っ!

そんなことしちゃいけないって、泣いてるはづきは見たくないって、夢の中で叫んでるんだ。なのに気がつくとおれは、楽しんでるんだよ。

おれが はづきにいやらしいことして、楽しんでるおれがいる! 嫌だ おれは こんなの、おれは絶対に許せないっ!!」

叫び声が、風呂場に響いてる。おれの声だけが、何度も、何度も。

声が消えるのといっしょに、腹がぎゅっと締められた。やわらかいものが、背中に当たってる。

おれは、もう、動けなかった。

いったい、何分経ったんだろう?

おれの背中が、ちいさな息の音と一緒に、やわらかく動いてる。脈打つ音が、体に響いてきてる。

さっきと違う。おなじものはずなのに。今はそれを感^じてるだけで落ち着いてくる。さっきみたいに、血がひとところに集まる感じじゃなくて。

「こんなの、わたしじゃない?」
え?

静かな風呂に、突然はづきの声が響いた。
「それじゃ、わたしって、どんなひと?」

泣き虫?」

いや。

おれは首を振った。よく泣くけど、泣き虫なんかじゃねえ。

「おとなしい?」

いいや。

おれはまた首振った。そりゃ騒がしくはないけど、よく動かし、おとなしくなんか

「いつでも笑ってる?」

ちがつ。

やっぱり、おれは首振った。怒ったり、泣いたり、いろんな顔があるやつだよ。

「いつも優しい?」

ちよつと考えるから、おれはしつかり首を振った。

そつだ。他のやつびが思ってるほど、こいつはベッタバタに優しいわけじゃねえ。

「そつぢ」

腹に回ってる手に、力が入った。

「いまの全部に違つて言えるのは、まさるくんだけ。どれみちゃんでさえ言えないわ。

本当のわたし そんなのがあるとしたら、それを知ってるのは、まさるくんだけなのよ」

「そつか」

思わず、想いが口に出た。そつだ。背中にいるのは、本物の『はづき』は、夢の中の女じゃないんだ

「ありがとう、まさるくん。話してくれて。

もう少し待ってて。私も、みんな話すから。勇氣
できたら、きつと話すから」

くらつ

な、なんだ? いきなり足元がゆれたような気がし

たな。やべえ、おれ、そんなに長湯してたんだ

「まさるくん、いま、ゆれなかった?」

なに?

おれがうなずくと、はづきがおれから手を離して、

心配そうにあたりを見回した。おれの気のせいじゃないのか。じゃ、いったい

「たいへんたいへん!」

考えてるといきなり、脱衣所から血相変えたぽつぷが飛び込んできた。

「たいへんだよ、はづきちゃん! うちに帰れないって!」

なんだって!?

「どうしよう 明日は戻らなくちゃいけないのに」

客間に戻ってきたおれたちが見たのは、窓の外の風景だった。道が、半分なくなってる。

よく見りゃ、外は大雨だ。風呂にいたときはまるつきり気がつかなかったのに。

「電話は」

「ごめんなさいね。ここには電話ってないのよ」

「携帯もダメみたい。圏外になってるよ」

リリカおばあちゃんの背中から、ぽつぷが声かけきた。

弱つたな。おれはまだいいけど、はづきにズル休みさせるわけにも

「そうねえ はづきちゃん。使っ?」
ん?

リリカおばあちゃんが近づいてきて、はづきにそっついた。こんなときでも笑顔のまま、ちよつとイラつとしたけど はづきが、なんだか妙な顔してるな。

「まさるくん、ちよつと、いい?」

たつぷり何分か考え込んでから、はづきが言った。

「え? おれか?」

こくつ、つてうなずいたあいつの顔、すこく固かった。

「もし もしもよ? いますぐ美空町に帰れる、って言ったら どうする?」

なに!?

「冗談　　って言おうとして、おれは開きかけた口を閉じた。はづきの後ろに立つてたぼつぶが、じつとこっち見つめてる。」

「シャレじゃねえんだ。これは。」

「まさるくん、お願い。答えて　　」

「はづきとぼつぶの真剣な顔を見ると、だんだん落ち着いてきた。」

「感じるんだ。はづきが勇気を出してるのが。」

「条件は？」

「びっくりした顔のはづきに、おれは言った。」

「タダで帰れるわけじゃないんだろ？　でなけりゃ、行きだつてそれで来れたはずだもんな。」

「で、帰る条件つて、なんだ？」

「条件はね、あなたの覚悟ですよ」

「答えは、背中から来た。」

「リリカおばあちゃんが、おれとはづきの肩に手を置いてたんだ。」

「覚悟つて　　」

「肩から、すつ、と離れた手が、おれの背中にふれた。おばあちゃんはそのまま、部屋の隅におれたちを連れて行つて、」

「さあ、ここよ」

「目の前に、とびら。ボロいわけじゃないんだけど、妙に古い感じがする。けどこれ、どっかで見たことあるな　　ああ、はづきたちのたまり場、MAHO堂で見たんだ。いつも閉まつてる、おかしなとびら。あれと同じだ。」

「はづきちゃん、いいのね？」

「藤原が固い顔でうなずくのと一緒に、目の前のとびらが、開いた。」

「とびらの向こうは、廊下。その向こうに大きな部屋。なんか、見覚えのある　　っていうか、これ、」

「MAHO堂　　」

「言った瞬間、はづきがびくつ、とした。」

「つてことは、本物、か。」

「ぐくつ、て音。つば飲んだ音が、頭に響いた。

「さあ、覚悟はいい？ ちゃんと考えて、自分の意志で決めるんですよ」

リリカおばあちゃんの声が、厳しくなった。さっきまでの、のんびり声じゃない。

おれは、おばあちゃんにだけ見えるように、さつとうなずいた。そして、ゆっくり息を吸ってから、またとびらに向き直って、

「藤原あ」

「な、なに？」

びくつとした動きが、ちよつとだけおかしく思えるな。

「おまえ、小一のころ、おねしょしたよな？」

「な、な、なに!？」

おろおろした顔を見てると、おれの胸が落ち着いてくるよ。 さっきのおまえも、そつだったのかな。

おれは、ちらつとおばあちゃんを見た。にこにこ笑ってる顔が、ほんのちよつとだけ、うなずいている。

「ブランコが高く上がりすぎて泣いたり、ジャンゲルジムから降りられなくなったり、あと」

「やーっ！ まさるくんのバカっ！ もう、いきなりなに言い出すのよっっ!!」

両手を上げて何か投げようとしてるあいつに背を向けて、気づかれないように息をひとつ飲んでから、おれは足を出した。

足が、扉の向こうにつく。いまおれは、普通の人間が通れないところをまたいでるんだ

「だからさ、知ってる秘密がひとつ増えたくらいで、おれがびびるかって。

ばかにすんなよ。はづき。」

ぱたん。

とびらがしめる音が、静かな家に響いた。

外には、笑ってるみたいな月が浮かんでる。少し

だけ吹いてる風は涼しい感じで、湿気なんかぜんぜんない。

「こつちは、雨降ってないんだな」

傘なんか持ってきてねえし、よかつたけど」と

びら一つむこうが大雨だ、つてのは妙な感じだよな。

「はづきちゃん、テレビ見てみて」

「え？ テレビ？？」

「ほら、ニュース番組とかさ、早く早く」

「ええ、いいけど、いったいなに あら！？」

はづきたちの声をBGMに窓の外を眺めてたけど、いきなり妙な声が混じってきた。なんだ？

声のする方に行ってみると、ふたりでまじまじと

テレビを見た。肩越しに見えるのはニュース番組。

指さしてるのはアナウンサーの後ろの、今日の日付があるところ。9月 17日だつてえ！？

「お、おい。これって、昨日の日付じゃ」

「あゝあ、やつちゃったあ」

ぼっぶが軽い声で言った。理解してないのか、こ

いつ？

「まえにね、ももちゃんのいるMAHO堂に行ったときもそうだったのよ。ムリにとびら開けると、時間違つちゃうことあるみたい」

はづきも、なんか苦笑いしかけの声で答えてる。おれは、ちょっとだけ頭抱えちゃった。

「んゝ、ま、いつか。一日得したと思えば。」

じゃ、あたしは帰るから。おふたりさん、ごゆっくり」

ああ、これがこいつらの常識ってことが。理解できねえわけ

って、『帰る』だつてえ！？

「ちょ、ちょっと待てぼっぶ。家にはおまえがいるんだぞ！」

思わず肩をつかもつとしたのを、ぼっぶがびよん、と避けやがった。

そのままおれたち見て、ニカッ、って笑ってる。この笑い方見たことあるぞ

そつ、こいつの姉ちゃんガイタズラしてるときと同じ、だ。

「知ってるよ。だってねえ 昨日、いつしよに寝たんかも〜ん」

なに!? ってことは、こいつ最初から、こうなること知ってたのかよ!!

あ、こら、まて あ〜あ、行っちゃった。

「どうする、まさるくん?」

「ああ、うん はづき、お前きのう、自分に会ったか?」

おれは、はづきの顔をじっと見つめた。答えなんかわかってるのに。

「じゃ、じゃあ、しかたねえよな。今日は、ここに泊まるとすっか」

おれはそのまま部屋を出ようとした。ふとんとか、探さないといけないしな。どこに あん? なんか、腕がひっかかっている?

くいつと腕を上げようとしたら、はづきがついてきた。服の腕のところを、きゅっつつかんで、おれ

の顔を見ながら首を振ってる。

「しかたない、じゃダメよ。ね?」

あ、っちゃあ、こまかききれなかったか。

「あ〜 だめだ、参った!」

おれが両手を上げたたん、にっこりしながら耳に手をあてて、次の言葉を待ってるよ。ちえつ。

息を大きく吸って、まっすぐ顔を見て。MAH O 堂の匂いが、がんばれって言ってるような気がする。

よしー!

「はづき ひと晩、一緒に泊まってくれ」

こっくりとうなづいた顔が、とっても幸せそうに見えて、おれは思わず目をそらしちゃった。

おれを追い越して、二階に上がっていくあいつのうしろ姿を見ながら、おれは思った。

ああ、今日は今までで一番、気持ちよく眠れそうだ。